

レヴァント回廊の歴史を探る

—第4次(2018年)・フェニキアの港バトルーン遺跡の試掘調査—

西山 伸一 中部大学人文学部准教授

ジャンニン・アブドゥル=マッシーハ 国立レバノン大学文学人間科学学部芸術考古学科教授

Investigating the history of the Levantine Corridor: The Fourth Season (2018), the Excavations of Phoenician Port of Batroun, Lebanon

NISHIYAMA, Shin'ichi Associate Professor, College of Humanities, Chubu University

ABDUL MASSIH, Jeanine Professor, Department of Arts and Archaeology, Faculty of Letters and Human Sciences, Lebanese University

1. はじめに

レヴァント回廊は、旧石器時代から現代に至るまでさまざまな人間集団の興亡の歴史を刻み込んできた。「ベカー高原南部サーヴェイ・プロジェクト(Southern Beqa' Survey Project)」(以下:SBSP)は、2015年以降、これまで調査がほとんど行われてこなかったベカー高原南部を対象としてきた。しかし、2018年の第4次調査は、レバノン考古総局の要請もあり、ベカー高原ではなく地中海沿岸部に位置するバトルーン(Batroun)遺跡を調査することとなった。この遺跡は、ベイルートの北50キロメートル、世界遺産ビブロス

(現在名:ジュベイル)の北20キロメートル、レバノン第2の都市トリポリ(またはタラーブルス)の南30キロメートルに位置する(図1)。残念ながら遺跡は、現代のバトルーンの町にほとんど覆われている(図2)。これまで住宅建て替えや開発などにより、街中では断片的に試掘調査が行われているが、本格的な学術調査は皆無であった。現代のバトルーンは、旧市街が美しい人口約1万人のこぢんまりとした観光地である。ただ夏季にはリゾート地としてナイトライフを楽しむ人々で混雑する。町の人口の大半はキリスト教徒であり、マロン派やギリシア正教の教会を多くみかける。

遺跡の一部であり、この町を象徴するものの1つとして、海際にそそり立つ「フェニキアの壁」とよばれる遺構がある(図3)。この石壁は、長さ約230メートル、4メートルほどの高さをもつ。実は、この石壁は、沿岸部に突き出した岩塊から石材を切り出すことで形成された。つまり石切り場の痕跡として残されたものである。この壁の目的は、波の浸食から町を防御する

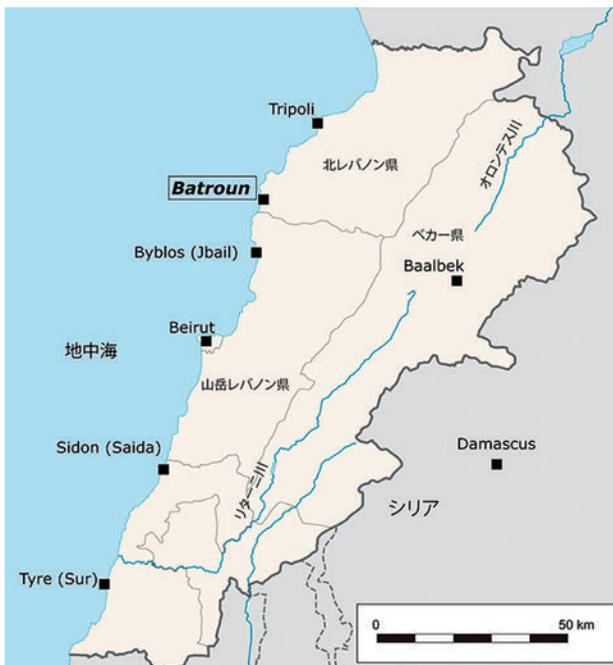


図1 レバノンの地図とバトルーン遺跡の位置



図2 バトルーン遺跡とその背景に広がる現代の町(地中海側よりUAVで撮影)



図3 バトルーン遺跡の沿岸部にある石切り場跡と「フェニキアの壁」(右手)

ためであったと思われる。いわば防波堤である。近年まで、壁の内側にある石を切り出した跡の窪みにプラスチックを貼り、そこに海水を入れて蒸発させ、塩がつくられていた。しかし、現在では製塩業もすたれ、石切り場跡は、週末にカップルや子供づれの家族が訪れて海を眺める展望地となっている。

「フェニキアの壁」は、地元ではフェニキア人が作ったと噂されてそのようによばれているが、実際のところ学術的調査は行われておらず、建造時代は不明である。バトルーンという地名は、もともとギリシア語の Botrys(Bothrys)に由来し、後にラテン語化されて Botrus となった。ヘレニズム時代以降、レヴァント沿岸の港町として古典文献に登場するが、これまでその全容は明らかになっていない。またオスマン朝時代にはこの地域で有名な「牢獄」があったといわれ、同時に交易港としても繁栄したという。

2. バトルーン遺跡調査の経緯

バトルーン遺跡は、これまで何度か考古学調査のメスが入ったことがあるが、いずれの成果も断片的にしか公表されていない。遺跡の中心である旧市街においては、考古総局の管理のもと住宅改築にともなう小規模な試掘が複数回行われたという。この試掘で、ヘレニズム時代からオスマン朝時代の遺構・遺物が出土したようであるが詳細は不明である。ところが、2017年に沿岸部に面した住宅地(約1200平方メートル)において、開発にともなう緊急発掘調査が実施された。考古総局からの情報によると、この緊急調査では、これまで見つかっていなかった後期青銅器時代(?)、鉄器時代、およびペルシア時代の遺構・遺物が発見されたという。しかし、残念ながら調査成果は公表されおらず、考古総局としては遺跡の価値を確認するため

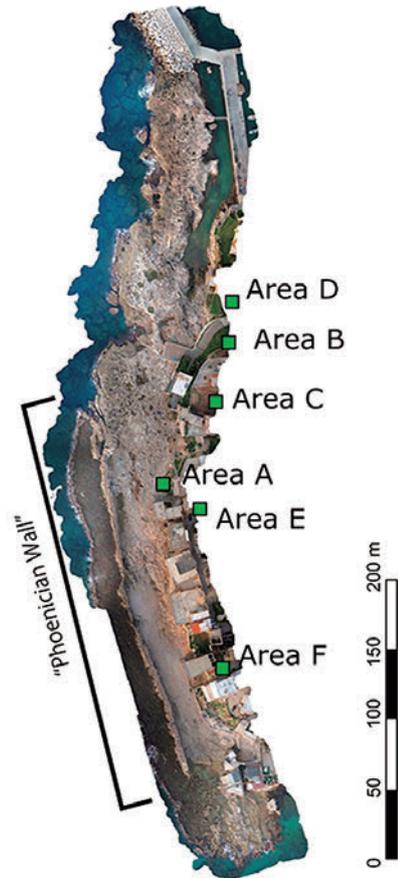


図4 バトルーン遺跡の Orthophoto と調査地点 (Orthophoto 渡部展也氏作成)

に本格的な学術調査が必要となっていた。

この2017年の緊急調査の結果を受け、考古総局から私たちのところへ学術調査の要請があった。実は私たちは2015年から何度か「フェニキアの壁」を含む石切り場跡を UAV と GNSS を使用して記録してきた経緯がある。そのため私たちに声がかかったようである。そこで、2018年はベカー高原の調査を休止し、急遽バトルーン遺跡の発掘調査を行うこととなった。なお、バトルーン遺跡が正式に学術的調査の対象になったのは、今回が初めてである。

調査は、レバノン大学と中部大学の合同調査として、2018年5~6月、および8月に実施された。調査区は、海際の石切り場跡に面した旧市街において複数の地区を対象とし、合計6カ所の地区(A~F地区)で試掘調査を行った(図4)。5~6月にはA~E地区を、8月にはDとF地区を調査した。バトルーン遺跡の調査の難しさは、遺跡のほとんどが旧市街の建造物で覆われているため、試掘可能な部分が非常に限られているところにある。以下に各調査区の成果概要を述べる。



図5 C地区(南から)。3つのトレンチ(右からC1、C2、C3)

3. 2018年調査の成果

3.1 A地区

この地区は石切り場跡に面した住宅から下方に位置する石切り場跡へむかう斜面に位置する。この斜面のふもと、つまり石切り場跡の表面に多数の土器片(鉄器時代からビンザツ時代までのものを含む)が散乱していることから、この斜面には遺跡の堆積層があるものと予測された。しかし、表面のクリーニングの結果、この斜面の大半には、現代の住宅建築にともなうコンクリート片などの廃棄物が厚く堆積していることが判明した。このため、この調査区は調査を中止した。

3.2 B地区

この地区は、旧市街の北に位置し、住宅地脇の斜面となっている場所である。遺跡がもしテルのようなマウンドの形をしているのであれば、その一部ではないかと考え、ここに試掘トレンチ(2×10m)を設定した。しかし、上層1メートルほどはオスマン朝時代から20世紀前半の堆積層であり、石組み遺構(家畜小屋?)が検出された。この石組み遺構の下方からも廃棄物の厚い堆積がみられた。トレンチの最も深い部分(地表下約4メートル)では、新たな石組み遺構が検出された。現在のところこの遺構の年代は不明であるが、鉄器時代の可能性もあると考えている。

3.3 C地区

沿岸部に面した住宅地の庭で、2017年の緊急調査が行われた住宅地の北に位置する。旧市街の中では比較的広い空間であったので、ここでは3カ所の試掘トレンチ(C1~C3)を設定した(図5)。C1(3×5m)ではオスマン朝時代の石組み遺構の下からヘレニズム時代の遺構が検出された。赤色のテラ・シジラタなどこの時代に特徴的な遺物が出土した。C2(3×5m)はC1の

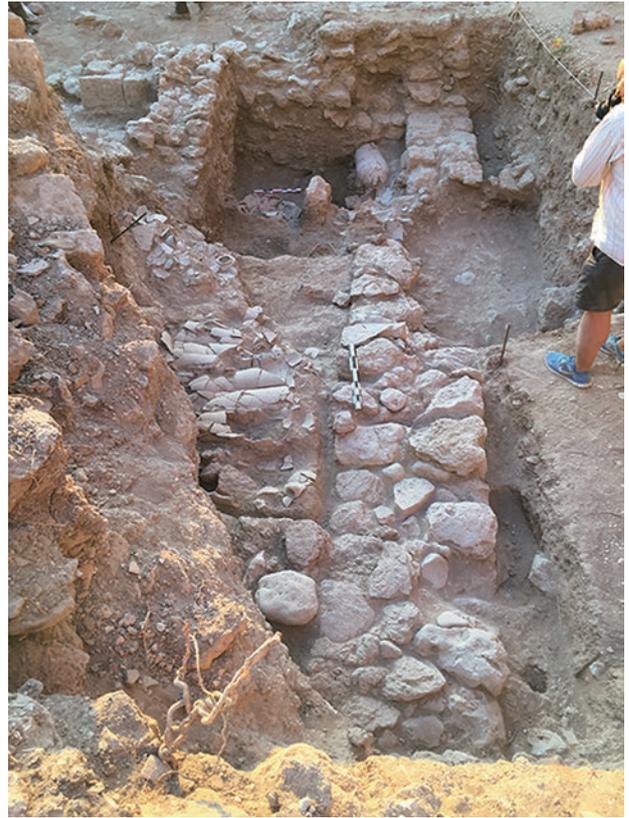


図6 D地区(東から)。手前がペルシア時代で奥が鉄器時代の層

西に位置するが、ここでオスマン朝時代の遺構の下にビンザツ時代のモザイク?床と思われる断片が出土した。さらにその下にはヘレニズム時代と考えられるプラスターで覆われた床面と壁が検出された。またトレンチの北東部では、鉄器時代と思われる壁の一部がヘレニズム時代の遺構の下から検出されている。C3(3×3m)はC2の北西に設置された。ここでは、中世の城壁あるいは斜堤と思われる大型の壁の一部が出土した。壁の表面は分厚いプラスターで覆われており、バトルーンの防御施設の一部であった可能性がある。

3.4 D地区

B地区の北にあり、調査区のうちで最も北に位置する調査区である。ここからは、5-6月の調査中(トレンチは2×4m)、表土層直下で大量の鉄器時代土器が出土した。このため、8月に再度本格的な調査を実施した。トレンチは以前のものから南に約4m、東に約6m拡張され、全体で約70平方メートルを調査した。その結果、ここでは、今回の調査で唯一鉄器時代とペルシア時代の明確な遺構・遺物が検出された(図6)。8月に調査区を拡張したところ、「倉庫」と思われる石組み遺構から大量のアンフォラ(ほぼ完形のもを多く含む)が出土した(図7)。その他、バイクロームの



図7 D地区の鉄器時代「倉庫」と思われる部屋とアンフォラ出土状況

彩文をもつボウルやジャグレットなどが発見されている。詳細な分析にはまだ時間がかかるが、アンフォラの型式から前8～7世紀頃に年代づけられると推測している。この調査結果と2017年の緊急調査の成果をあわせるとバトルーン遺跡に鉄器時代の居住層があったのは確実であり、おそらくフェニキアの港町として繁栄したことが推測できる。また、トレンチの東部分においてペルシア時代の遺構が鉄器時代の層を覆っていることが確認できた。つまり、鉄器時代の後、断絶することなくペルシア時代にも港町は繁栄した可能性が高い。ペルシア時代の層からも大量のアンフォラ（一部は完形になる）片、青銅製フィブラ、アラバスター容器、ギリシア系土器などが出土している。

3.5 E地区

この調査区は、沿岸部の南方にある個人住宅の庭に設定したトレンチ(2×4m)である。試掘の結果、現代の建築廃棄物の下から複数の石組み遺構が複雑に重なる状況が検出された。これらの遺構の年代判定の決め手となる遺物は乏しかったが、おそらく中世からオスマン朝時代にかけての遺構であると思われる。これらの遺構の下にさらに古い遺構が埋没している可能性はあるが、トレンチが拡張できない事情もあり、この調査区の試掘はこれで中止した。

3.6 F地区

この調査区は、沿岸部の最も南に位置する調査区で、北と南が住宅に挟まれた場所である。調査は8月に初めて実施した。トレンチ(1.5×3m)は、岩盤に掘り込まれた石切り場跡を利用した空間に設定した。トレンチの北側は石を切り出した岩盤となっている。このトレンチの西部分(1.5×2m)を掘り下げたところヘレニ



図8 F地区(南から)。アンフォラ出土状況

ズム時代に年代づけられる土器が大量に出土した。さらに、完形のアンフォラが少なくとも3点立ったままの状態がこの空間に置かれているのが発見された(図8)。アンフォラの周辺からは、織物用錘(円盤形で穿孔が1つあるタイプ。そのうち1点にはギリシア語の銘文あり)、大量の小さな巻貝なども出土している。この部屋の性格はまだ完掘していないため不明だが、おそらく倉庫の一部であったと考えている。近い将来この調査区は再度発掘をする予定である。

4. まとめと展望

SBSPの2018年シーズンは、ベカー高原ではなく地中海沿岸部に場所を移して調査を実施した。バトルーン遺跡初の学術的調査では、鉄器時代からオスマン朝時代にかけての幅広い時代の情報が得られた。本遺跡の調査は、いましばらく継続し、開発によって破壊の危機にあるバトルーン遺跡の歴史を再構築するデータを収集していきたい。6カ所の調査区では、鉄器時代からペルシア時代の遺構・遺物が出土したD地区と、ヘレニズム時代の遺構・遺物が出土したF地区の調査が特筆に値する。バトルーン遺跡は、これまでフェニキアの港町であると考えられてきたが、確実な考古学的証拠がなかった。今回の試掘調査はそれを裏付ける成果であり、フェニキア本土の様相に新たな光を当てるものである。

現在レバノン沿岸部は急速な開発により多くの遺跡が失われている。その中でバトルーン遺跡はある意味、レバノン沿岸部で残された数少ない重層的な歴史が追える遺跡であることは確かである。私たちの本来の関心は、ベカー高原南部であるのには変わりはないが、しばし沿岸部にも関心を向けながらレバノン考古学の発展に寄与したいと考えている。

バトルーン遺跡の調査は、レバノン大学、科学研究費補助金(分担金)、中部大学教育研修費、および個人の出資者からの支援を受けた。レバノンにおいては、レバノン文化省考古総局局長 Sarkis el-Khoury 氏、同局北レバノン地区担当官 Samar Karam 女史、同局職員 Rita Lichaa 女史、および在バトルーンの考古総局職員に多大なる支援・協力をいただいた。フィールド調査では、レバノン大学の Ziad Jablut 氏、Mouhammad Abdel Sater 氏、Elie Akiki 氏、Marc Yared 氏、Paula Abou Harb 女史らが参加し、調査を成功に導いていただいた。また中部大学・渡部展也准教授には UAV や Orthophoto の作成で多大な支援をいただいた。この場をかりて関係諸氏に深く感謝申し上げます。

■参考文献

- ・ J. Abdul Massih and S. Nishiyama 2018. *Batroun Archaeological Report. 2018 Report of Archaeological Excavation in Batroun* (Field report submitted to Lebanese DGA, Jan. 2019).
- ・ 西山伸一、ジャニン・アブドゥル=マッシーハ 2018 「レヴァント回廊の歴史を掘る—レバノン・ベカー高原南部考古学踏査プロジェクト・第3次(2017年)—」『第25回西アジア発掘調査報告会報告集 平成29年度考古学が語る古代オリエント』 pp.44-48. 日本西アジア考古学会
- ・ 西山伸一、ジャニン・アブドゥル=マッシーハ 2017 「レヴァント回廊の歴史を探る—レバノン・ベカー高原南部考古学踏査プロジェクト・第2次(2016年)—」『第24回西アジア発掘調査報告会報告集 平成28年度考古学が語る古代オリエント』 pp.136-140. 日本西アジア考古学会